

隔離ベッドにおけるキュウリの摘心栽培

野口 貴・海保富士男・沼尻勝人
(園芸技術科)

【要 約】 隔離ベッドにおけるキュウリの摘心栽培に適した品種はカルシウム欠乏症の程度が軽く収量の高い「ちなつ」であり、次いで「セレクトⅡ，アルファナー節成」である。

【目 的】

キュウリの隔離栽培技術を開発するため、ベンチ型隔離ベッドを用い、培地、防根透水シート、培地量、根圏の範囲、給肥・給液方法、給水シート、接ぎ木や台木品種の影響、つる下ろし栽培における適性品種などについて調べてきたが、摘心栽培における品種検討は未検討であった。そこで、半促成用キュウリ 8 品種を用いて収量性や生理障害発生の難易について明らかにし、キュウリ隔離ベッド栽培技術確立のための資料とする。

【方 法】

2013年2月28日に台木「ゆうゆう一輝（白）」、穂木として「アルファナー節成」以下 8 品種を播種し、呼び接ぎ後、3月31日にベンチ型隔離ベッドに定植した。培地は新品のヤシ殻「ココユーキ」を用いた。摘心栽培では、主枝を25節で止め、側枝（子づる、孫づる）は生育状況に応じて1～2節で摘心した。また、対照として「アルファナー節成」を用いて子づる3本つる下ろし栽培を行った。栽植距離はいずれも株間60cm、2条の栽植（144株/100m²）とした。肥料はタンクミックスA&Bを生育ステージに応じて施用し、総窒素量は株あたり41gとした。また、カルプラス（CaO 11%）を5月に株あたり54.5g施用した。

【成果の概要】

1. 摘心栽培で可販果数が最も多い品種は「ちなつ」であり、次いで「セレクトⅡ，アルファナー節成」となった（図1，2）。「ちなつ」は側枝での着果が多く、「セレクトⅡ，アルファナー節成」は旬による変動が小さく安定していた。
2. 各品種の主枝着生葉におけるカルシウム欠乏症の程度を表1に基づいて調べた結果、症状が最も軽いのは「ちなつ」で、「セレクトⅡ，アルファナー節成，ズバリ163」も比較的軽かった（図2）。カルシウム欠乏症の軽い品種で収量が高くなる傾向にあった。
3. 摘心栽培とつる下ろし栽培（3本仕立て）の比較では、前半の収量は摘心栽培で高かったが、全期間ではつる下ろし栽培で高くなった（図3）。下物果の発生数は、摘心栽培では徐々に増加していったが、つる下ろし栽培では中期までは極めて少なく推移した。ただし、7月中旬以降はつる下ろしでも急増した。
4. まとめ：キュウリの隔離ベッド栽培において、摘心整枝で8品種を比較した結果、カルシウム欠乏症の程度が軽い「ちなつ」で収量が高く、次いで「セレクトⅡ，アルファナー節成」となった。「アルファナー節成」を用いて整枝方法を比較した結果、つる下ろしで収量が高かった。今後、他の品種でも同様な結果となるか、検討を要する。

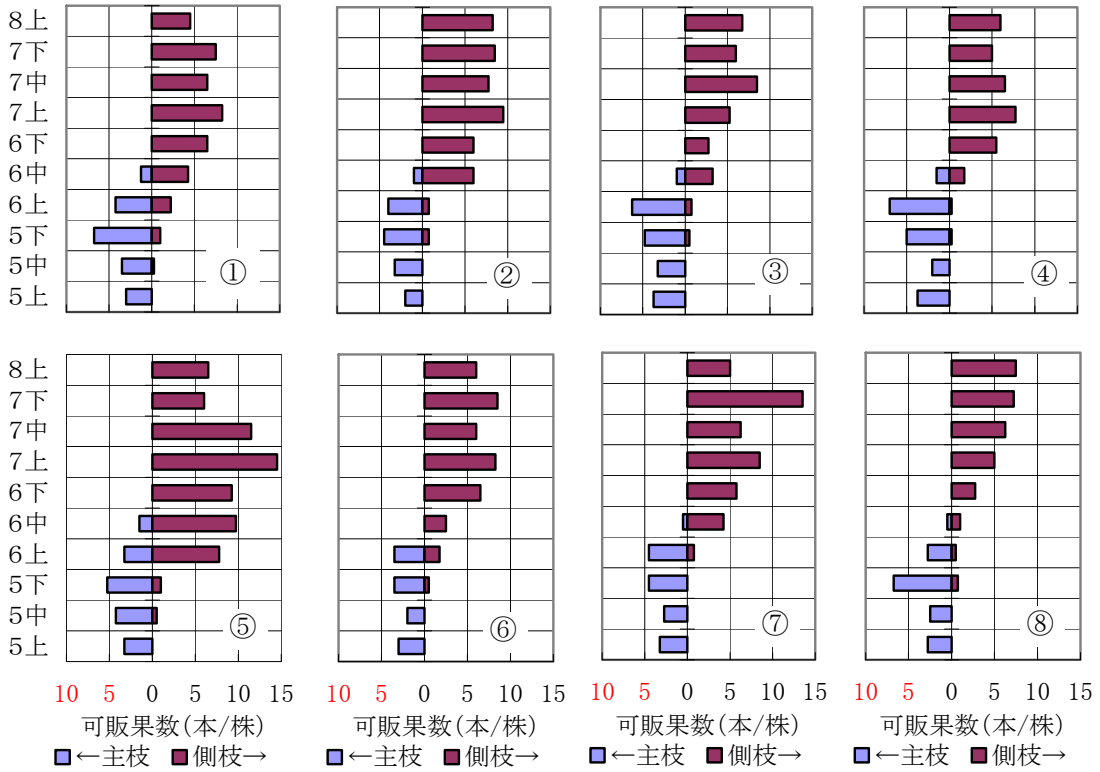


図1 摘心栽培におけるキュウリ8品種の旬別可販果収穫数（品種番号は図2を参照）
 ①アルファード節成, ②セレクトII, ③エクセレント節成2号, ④エクセレント節成353,
 ⑤ちなつ, ⑥グリーンラックス2, ⑦ズバリ163, ⑧クラーージュ

表1 キュウリのカルシウム欠乏症の程度と症例

ランク (障害の程度)	1	2	3	4	5
症例					
	葉縁の白化	葉縁の萎縮	葉縁の湾曲	葉身の萎縮	葉身の萎縮(甚)

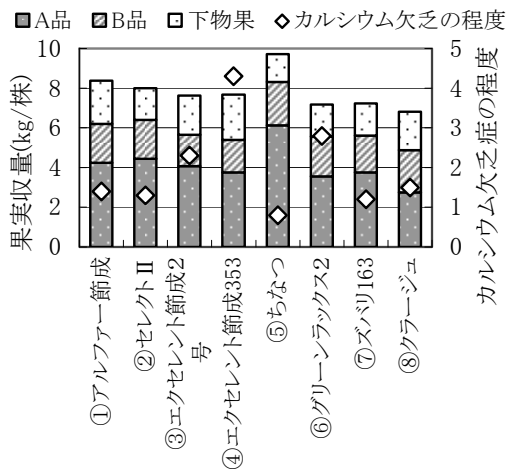


図2 8品種の果実収量およびカルシウム欠乏症の程度

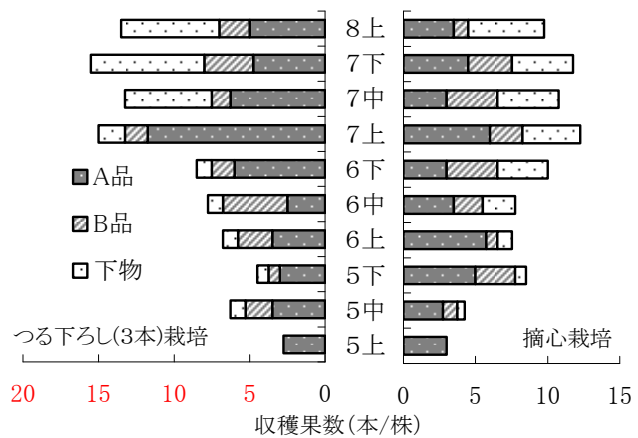


図3 整枝方法の違いが「アルファード節成」の旬別収穫果数に及ぼす影響